

フリーメイソンロジとユダヤ人コミュニティ

—— 18世紀ドイツ社会研究 ——

渡 邊 直 樹

はじめに

ヨーロッパにおいてフリーメイソンロジとユダヤ人コミュニティはともに長い歴史をもつ。しかし、18世紀ドイツの諸都市にようやく形成されつつあったユダヤ人コミュニティと、同じくこの時代にはじめて設立され普遍的憲章に基づいて精神も行動も自由で平等主義的団体として広がったフリーメイソンとの間には根本において何の連関もない。この両者は全く異質で別個の組織であり、両者間に政治的あるいは社会に敵対する同盟や陰謀が存在したかのような言論があったとすれば、ドイツ民族至上主義を掲げたナチス・ドイツの政治宣伝である。確かに、フリーメイソンの神秘主義とユダヤ人コミュニティの閉鎖性を考えると、キリスト教とユダヤ教の反目あるいはキリスト教徒と非キリスト教徒の対立の歴史を超えて共通した性格を連想させる。一方、ヨーロッパ近代の社会と人間精神の思想的基盤であった啓蒙主義の展開史から見ると、ここに新しい社会や人間思想を形成する上での接点も認めることができる。フリーメイソンロジとユダヤ人コミュニティはともにドイツ近代の社会史から見るとそれぞれ特殊な政治的、思想史的、文化史的位置を占めるからである。しかし、専制的支配者の側からは、両者とも社会のなかに権力の及ばない警戒すべきもう一つの「社会」を形成していると見えた。わけでも18世紀ドイツにおけるユダヤ人コミュニティのみならず、ユダヤ人とフリーメイソンとの連帯を想起すると、ドイツ諸領邦がなお一層社会に危険な要素をそこに読み取ったとしても不当なことばかりとはいえない。

平等と自由という人間の基本的権利を求めて闘ったドイツ市民と、ドイツ人と同等の公民権を求めて闘ったユダヤ人たちの活動の記録は、フリーメイソンロジにもユダヤ人コミュニティの成立にも反映している。

本稿は、これらフリーメーソンロッジとユダヤ人コミュニティという本来異質な二つの「社会」を18世紀ドイツの展開史のなかに位置づけようとする試論である。

フリーメーソンとユダヤ人コミュニティ

フリーメーソンが中世の石工たちの職業組織に起源をもち、18世紀になおその伝統理念が影響を持ち得たという事実がこの考察の出発点となる。

フリーメーソンの近代史は、イギリスのフリーメーソンロッジの統一組織結成に始まると見るのが定説である。石工職人が「徒弟」、徒弟奉公を済ませた「職人」、経験を積んだ「親方」という身分に分かれ、それぞれの身分に属する者たちがお互いに仕事上協力し合った。そこでは固有の伝統的概念が遵守され、技術が磨かれ、それらがともに伝授された。こうしたギルドの存在が堅固になるに従って、石工とは直接関係をもたないが、そこに寄宿し、彼らの仕事を援助して利益を得ようとする仲間が登場した。彼らはおもにギルドの組織と職人たちの精神的伝統を支え、それを理論的に理想化した。彼らは「フリー」「メーソン」、つまり用語の意味において「自由な」「石工仲間」から、石工とは直接関係をもたない「石工から自由な」「仲間たち」として認知され、最終的に職人とは別の力と立場を獲得した団体へと歴史的に発展した。1717年にロンドンでこの種のギルドがまとまってロッジを形成し、共通の憲章作りに着手した。そして、1723年にジェームズ・アンダーソン (James Anderson) によって完成され、公刊された憲章がその後誕生するロッジ全体を拘束していく。このフリーメーソンロッジの憲章に含まれた会員の平等主義と宗教的寛容の精神は、ヨーロッパ社会のなかで暮らすユダヤ人とユダヤ人コミュニティが歴史的に実現を求めてきた要求にほかならなかった。フリーメーソンロッジとユダヤ人との間に何らかの政治的連帯を見ようとする傾向が、ここに認められる。

中世において、ユダヤ人は確かに社会的職業的組織を形成できる状況になかった。石工の伝統にヘブライ語の諺やカバラのユダヤ的異教的痕跡があるにしても、これはユダヤ人とかかわりを想定しなくても説明できる。エルサレムのソロモン王の神殿造営が、石工という職業訓練上の象徴となったという見方があるが、ユダヤ人社会とフリーメーソンを一体とみるこの見方は歴史的眞実とはみなし難い。フリーメーソンたちがロッジの起源をできる限り古代にまで遡ろうとする試みは、自分たちの歴史に権威と正統性を与えようとするものであり、わけてもユダヤ人たちは伝統と象徴の意味を固有にわがものとするこ

によって、フリーメイソンロッジにユダヤ人コミュニティとのアイデンティティを認めようとする傾向が顕著である。ユダヤ人のタルムートには、実際にフリーメイソンの秘教的積義がある。旧約聖書にも、神の子や平和を願う学者の存在が記されている。しかし、タルムートの時代に建築に携わった石工の団体が形成され、歴史的に何か大きな役割を果たしてきたことを証明する根拠はない。そもそもフリーメイソンの神秘主義とユダヤ人固有の歴史的伝説を同次元で捉えることは不合理であろう。ドイツ社会のドイツ人・キリスト教徒とそこに移住し居住許可を得る必要があったユダヤ人・ユダヤ教徒は、歴史的にみて互いにむしろ敵対的であったのであり、一部裕福なユダヤ人は非ユダヤ人社会と経済分野と学問分野で関係をもっていたとしても、ユダヤ人は社会的には彼ら自身の生活圏のうちになお留まらざるを得なかったからである。

しかし、18世紀ドイツのこの社会構造に次第に変化が起こってきたことはフリーメイソンロッジの増加や経済力を背景にしたユダヤ人コミュニティの形成、このコミュニティとドイツ人コミュニティの間の垣根が確実に低くなってきたことに見てとれる。そして、何よりも17世紀ドイツに「言語協会」をはじめとして、アカデミーやサロンなど読書や議論の場としての団体が多く誕生したことの影響が大きい。それらの構成員はなお職業や社会的位階に制約されていたが、厳しく隔てられていた階級的な社会構造を動揺させ、フリーメイソンロッジの成立にとっても有利な要素となった。こうした団体は堅固な現実社会のヒエラルヒーを覆すものではなかったが、会員となった個人は決められた生活圏から時間的精神的解放感を味わい、知的刺激や情報を得た。そして、彼らの活動は徐々に世間に浸透していった。わけでも、職業や階級の別なく自由な討論の場を提供したフリーメイソンロッジの存在は、厳格な入会規定が定められていたとしても、この18世紀ドイツの社会構造の秩序を揺るがす端緒となった。

強固で閉鎖的であったユダヤ人コミュニティもこうした社会的変化の影響を受けた。それはユダヤ人と非ユダヤ人が互いに接近したという前提の上に成立するものであり、宗教や階級の相違という以上にユダヤ人コミュニティがゲットーという街の片隅に追いやられ、キリスト教徒と同等の公民権を認められていなかったという社会史からみて前進であった。アンダーソンはロッジの憲章で、神を信じ、徳を守る人々すべてに会員になる資格を認めた。しかし、この時点でユダヤ人を考慮にいれてはいない。その第一条項は神と宗教とフリーメイソンの関係を規定している。

「神と宗教について」

メーソンはこの地位を得ることによって道德律に従う義務がある。すなわち、その人が正しく神の御業を理解すれば愚かな無神論者となることはないし、不信心な放蕩者になることもない。しかし、昔は、メーソンは何であれ、その国、その民族の宗教に従うことを命じられていた。しかし、今は彼ら独自の見方は見方として、すべての人が同意できるあの宗教に従ってもらうことがよい。その名前や宗旨や信念がどんなものであっても、善き人、誠実な人、名誉を重んじる人、清廉な人たることが重要である。これによってメーソンロッジは、永遠に隔たっていた個々の人間にとって真実の友情が得られる融和の場となった¹⁾。

この条項に、当時のユダヤ教徒とキリスト教徒をめぐる問題性が読み取れる。名前とか宗教とか信念とかで分け隔てられている人間が、それらを超えて一体となれる「宗教」に従う義務を負うという。この宗教とはキリスト教のことであろう。憲章制定10年後に、ロンドンでロッジ入会を申し出たユダヤ人をめぐり議論が行われたという記録が残っている²⁾。ユダヤ人については入会がじじつ認められていない。フリーメーソンロッジがすばやく根づいたオランダでも、一応ユダヤ人にも門戸は開かれていたが入会が許可された例はなかったし、革命前のフランスでもドイツでも事情は同じであった。

ドイツのフリーメーソンはイギリスに起源をもち、憲章の内容も組織の形態も基本的にイギリスと同じであったが、もう一つドイツ的事情がここに反映している。ドイツ諸領邦国家では君主の宗教が国全体の宗教を規定しており、従って、フリーメーソンロッジへの入会は暗黙のうちにカトリックであれ、プロテスタントであれ、キリスト教徒であることが一層強く前提とされた。ユダヤ人のなかでもロッジ設立の最も初期において裕福で教養ある人間が資金や信用上の後援者として入会できた例はあった。しかし、このことは、実際にはフリーメーソン本来の自由と平等を原理とする基本理念に基づくというよりも、運営の問題を解決する必要から生まれた。国教会を有し、理神論が議論の対象となったイギリスと比較して、ドイツではプロテスタント正統派のドグマが支配的であった宗教的事情が、ユダヤ教との区別を明確にすることを特に要求していたのである。宗教と神学、キリスト教と教会とが一体であったドイツでは、自然宗教について考えられたように、信仰のみが宗教的真理であると主張したところでキリスト教精神の復活が果たされることはなかった。従って、フリーメーソンロッジにおいて、ユダヤ教とキリスト教の別を超えたところ

に信仰という普遍的精神を共有できる基盤が存在し得なかった。ユダヤ教徒がフリーメーソンロッジに入会できる可能性はじじつほとんどなく、そのためには社会構造の上で変化が生まれる必要があった。

啓蒙主義の理念を支える重要な原則の一つである人間の平等思想と宗教的寛容がフリーメーソンの基本綱領の一つであることを知ったユダヤ人が、フリーメーソンロッジに人間解放の組織を重ね合わせたとしても不思議はない。経済的に成功を収めたユダヤ人は、自分たちの伝統的な世界に満足せず、精神的には非ユダヤ的性向を強めていった。ドイツ西南のフランケン地方に住むフランク人のためのロッジ設立や維持にかかわったユダヤ人銀行家が多くいた。ベルリンではユダヤ人銀行家・イーザク・ダーニエル・イツィヒ (Isaac Daniel Itzig) がすでにロッジの会員であった。後にフランクフルトにロートシルト (Rothschild) 家の代理人として、ユダヤ人のためにフリーメーソンロッジを創設したジグムント・ガイゼンハイマー (Siegmund Geisenheimer) の証言によれば、イツィヒの紹介と少なからぬ入会費を納めることによって彼は会員資格を手中にできたという³⁾。しかし、支部組織ではなくいわゆる正規のロッジへの入会はキリストの教えを信じる者以外は占め出されており、従って、ユダヤ人は実質的に入会を拒否されていた。ユダヤ人たちはフリーメーソンロッジとかかわりをもつためには、18世紀の最後に至ってもなお支部組織で満足しなければならなかった。

しかし、規則と憲章に固執することがなかったむしろ地方の小さなロッジがユダヤ人のために組織されるという事態が生まれた。皇帝ヨーゼフ2世 (Joseph II) 時代のウィーンに1781年に設立された《アジアからヨーロッパにきた福音者聖ヨハネの兄弟たち》(Die Bruder St. Johannes des Evangelisten aus Asien in Europa) という名前をもつロッジの趣旨を検討すれば、この事情がよくわかる。このロッジ誕生の思想的背景には西アジアのヘレニズムに起源をもつカバラがある⁴⁾。もちろんヨーロッパの東とアジアの西の接点ともいえる都市ウィーンの地理的位置が、フリーメーソンの基本理念そのものにアジア的あるいはユダヤ的要素を与えたばかりではなく、地方固有の性格を反映したロッジの存在を許容する寛容をもっていた。

バイエルンの貴族ハンス・ハインリヒ・フォン・エッカー・ウント・エックホッフエン (Hans Heinrich von Ecker und Eckhoffen) がこのロッジ創設の中心人物であった。実体不明の秘密結社「薔薇十字団」(Orden des Rosenkreuzers) にかかわっていたこの人物が、ユダヤ人の味方としてフリーメーソンロッジに名を留める理由にはいささか胡散臭

いものがあるが、陰の後援者あるいは出資者として力をもったと推測される⁵⁾。史料によれば、ユストゥス (Justus) という東方諸国やエルサレムで暮らし、ユダヤのカバラ主義者とも交際があった人物がこのロッジでの実質的指導者となった⁶⁾。ユストゥスのこの経歴から見ると、《アジアからヨーロッパにきた福音者聖ヨハネの兄弟たち》に東方のユダヤ的カバラ的影響が認められることは当然であり、むしろこの思想的性格こそが特徴的であった。ユダヤのカバラ主義的著作の解釈や原典の翻訳に携わったのがトーマス・フォン・シェーンフェルト (Thomas von Schönfeld)、別名モッシュェ・ドブルシュカ (Mosche Dobruschka) であった。彼は、このフリーメーソンロッジの憲章にカバラ主義に典拠を有する自由主義的教義を採用し、自身もキリスト教徒としての洗礼を受けた。彼らはともにこの《アジアからヨーロッパにきた福音者聖ヨハネの兄弟たち》にほかのロッジとは異なる斬新さと歴史的伝統、さらに東方との親密性という神秘主義をも付加しようとした。この精神は、ロッジ伝統の神秘主義とともに命脈をたもち受け継がれていく。それはユダヤ人のためのフリーメーソンロッジに固有の精神構造を植え付けていった。

1784年11月に制定されたこのロッジの憲章の第一条項にはこうある。

宗教、階級、位階にかかわりなく、思想と行動において正しい人物であるならば、兄弟たちに誰もが入会できる。人類の善と幸福のみがわたしたちの取り組みの目的であり、宗教、出自、あるいは生来の階級、そのほかの付随的なことはなんであれ考慮されない⁷⁾。

《アジアからヨーロッパにきた福音者聖ヨハネの兄弟たち》に代表されるユダヤ人に開放されたロッジが、一方で、ユダヤ人たちをゲットーから解放する曙光となった。皇帝ヨーゼフ2世のウィーンにおける改革は、彼らに非ユダヤ人であるキリスト教徒と同等の市民的権利を原則的かつ平等に保証し承認するものではなかったが、ユダヤ人たちにウィーンでの生活基盤を与えることになった。じじつ、ヨーゼフ2世は宗教的寛容の勅令を1781年10月にボヘミア地方に居住するユダヤ人に、1782年1月にはオーストリアに居住するユダヤ人を対象に発令している。フリーメーソンロッジがユダヤ人に分け隔てなく開放されるためには、ユダヤ人と非ユダヤ人が自然に一体化できる社会的雰囲気が必要であったが、ウィーンにはそれがあった。

精神史から見ても、ユダヤ教徒とキリスト教徒との間が社会的に分離されていなければ

ならないという伝統的信仰は揺らいでいた。ユダヤ人に開かれたロッジが、この思想的雰囲気の中で両者の平等な資格と活動を保証する機会となった。その前提は、ユダヤ教とキリスト教を折衷するかあるいは両者を超越した普遍的宗教的真理という思想を提起したことであり、それはフリーメーソンの普遍主義的理念に留まるものであったが、歴史的に見れば一つの重要な思想上の転回点であった。

フランス革命の影響

フランス革命は人間生得の自然権を宣言した。この人権宣言は、フリーメーソンへのユダヤ人入会の問題を改めて浮き彫りにした。フリーメーソンの憲章には、人間の平等や宗教的寛容が保証されていたが、実際にユダヤ人の入会を承認する例はほとんどなかったからである。パリのロッジは革命後ようやくユダヤ人に対して会員となる資格があることを承認し、憲章を遵守するよう指導した。

フランス革命はドイツ社会のユダヤ人コミュニティにも影響を与え、たとえば、フランクフルトに住むユダヤ人は1811年に市民権を得た。プロイセンではカール・アウグスト・ハルデンベルク (Karl August Hardenberg) によってフランスに対抗する手段として社会体制の整備が図られた。この改革によって、ユダヤ人が政治的権利を得て、フリーメーソンロッジへの入会制限も事実上撤廃された。それはモーゼス・メンデルスゾーン (Mose Mendelssohn) らユダヤ人知識人の言論活動に多くを負った。しかし、ユダヤ人たちが一部公民権を得たこととフリーメーソンへの入会資格が認められたことは、フランス革命によるドイツへの精神的社会的圧力に大きく依存し、いわば上からの改革の結果に過ぎなかった。それゆえ、ユダヤ人がロッジ会員となる資格を得るかわりに、一方でまた新たな制限が設けられた。フランクフルトやベルリンの伝統あるロッジは、入会を希望する者がキリスト教徒であることを要求した。つまり、キリスト教に改宗したユダヤ人のみ入会が承認された。従って、実際にはユダヤ人に社会的権利が与えられる以前と変わりなく、ユダヤ人がフリーメーソンロッジに入会する道は依然として閉ざされていた。

しかし、フランス革命による自由・平等・友愛の精神の実践としてユダヤ人に対して非ユダヤ人と平等の権利を認めようとする社会的雰囲気のなかで、ユダヤ人に対して入会制限を撤廃しようとするフリーメーソンロッジが増え、あるいはユダヤ人のためにロッジを設立しようとする運動が起こった。フランクフルトではS.ガイゼンハイマーが『曙光ロッ

ジ』(Loge zur aufgehenden Morgenröte) を創設したが、それは一部裕福で教養あるユダヤ人のためではなく、入会を希望するすべてのユダヤ人のために開かれたロッジであった。ロートシルト家の一族である、ルートヴィヒ・バルーフ (Lidwig Baruch)、後のルートヴィヒ・ベルネ (Ludwig Börne) は7月革命後パリに亡命してドイツ批判を展開するが、この会員であった。

ラインラントやヴェストファーレン地方に進出したフランス革命軍によって創設されたロッジでは、独自の方針に基づいてユダヤ人に入会の機会を提供した。これらの新しいロッジは伝統的なロッジと決別しなければならないという前提に立ち、フランス本部のロッジの指導下でこの方針を実行に移した。従って、フランス側からの影響が弱まるとともに、ドイツではこの社会的にも精神的にも新しい理念と特定の目的をもつロッジの存立は危機に直面せざるを得なかった。

フランクフルトの『曙光ロッジ』の場合、《アジアからヨーロッパにやってきた福音者聖ヨハネの兄弟たち》の有力な会員であり、メンデルスゾーンの知己をも得てユダヤ人フリーメーソンのための熱心な活動家であったエーフライム・ヨーゼフ・ヒルシュフェルト (Ephraim Joseph Hirschfeld) の努力があった。彼はヘッセン辺境伯の理解を得てこの苦境を克服しようとした。ヘッセン辺境伯は自分に好都合な原則に従う限り、つまりフリーメーソンの儀式にキリスト教の刻印が認められる限り、たとえば『ヨハネ伝』による宣誓などを行う限りにおいてフランクフルトのフリーメーソンロッジの自治的存在を保証した。換言すれば、フリーメーソンのヒエラルヒーにキリスト教徒を優先することを承認させた。ユダヤ教とキリスト教とをカバラ思想に基づいて統合しようと企図していたヒルシュフェルトは、こうした提案をむしろユダヤ人にフリーメーソンロッジへの入会を促すものとして歓迎した。しかし、一方ではユダヤ教徒とキリスト教徒との宗教的対立を超えたところにヒューマンイズムの精神に基づいて、ユダヤ人と非ユダヤ人との社会的平等化を志向する人々もいた。彼らは社会的対立をむしろフリーメーソンの平等主義の基本理念で解決することを追求していた。『曙光ロッジ』の創設者たちには、むしろこうした人々が多かった。従って、ヘッセン辺境伯の提案はユダヤ人入会を認めるという口実のもとにユダヤ人を区別することにつながるものであると、彼らは考えた。『曙光ロッジ』は、原則論と妥協論とが闘わされるなかで、イギリスの正規ロッジの支持を得て、1848年のドイツ3月革命までフリーメーソンに入会を望む教養あるユダヤ人を支援する拠点となった。

ほかの地方ロッジについては、ユダヤ人入会をめぐる議論が十分になされなかった。

相変わらずフリーメーソンはキリスト教に強く依存しており、その精神的原理をなくすことはロッジそのものの基盤を揺るがしかねない危険があったからである。

ドイツ三月革命とユダヤ人フリーメーソン

1830年代のドイツ社会に生まれた自由主義的な雰囲気は、フリーメーソンへのユダヤ人の入会問題についてキリスト教徒との交渉を促す基盤を準備した。ユダヤ教徒とキリスト教徒はともに、ロッジ入会資格の根拠をフリーメーソンの基本理念との整合性の観点からそれぞれ歴史的、思想的反省を基礎として確立する必要に迫られた。このことは、フリーメーソンにおける憲章および儀式の新たな解釈と深化をもたらした。その結果、一方ではユダヤ人にロッジを開放する論証へ、また他方ではユダヤ人のロッジ入会を制限する論証へという相反する方向となってあらわれた。フリーメーソンロッジとユダヤ人入会者の問題は、フリーメーソンが解決すべき本質的かつ歴史的課題であった。ユダヤ人がドイツのフリーメーソンロッジへの入会を制限された根本的理由は、ユダヤ教にあったからである。それゆえ、ユダヤ人に対する制限撤廃の根拠は宗教的、歴史的、思想的議論に基づいて検討されなければならなかった。

1836年、テオドール・メルツドルフ (Theodor Merzdorf) は『メーソンの象徴、規定、歴史ならびに目的はいかなる宗教も占めださない』(Die Symbole, die Gesetze, die Geschichte, der Zweck der Masonei schliessen keine Religion von derselben aus, 1836) を著した。彼は、このなかでユダヤ人やイスラム教徒に『ヨハネ伝』に基づいてメーソンの誓いを立てる必要はないと主張した。確かに、イギリスやフランスでは入会者はロッジの憲章条文か聖書に基づいてメーソンとして宣誓したとしても、ほかの宗教の信者の場合には彼ら自身の「聖なる書物」によって宣誓する権利が認められていた。ライプツィヒにあるメルツドルフが所属していた『アポロロッジ』(Apollo Loge) では、こうした誓いを是認することは人間の理性的精神に拠ると見た。「フリーメーソンはすべての人を兄弟と見て、神、道徳、そして永遠の魂を信じるものは誰も排除しない⁸⁾。」これによって、ユダヤ人にも信仰を捨てることなく、フリーメーソンロッジに入会する権利が認められた。宗教的信仰に付随する儀礼的慣習は、ユダヤ教でもキリスト教でも人間精神を束縛するものであって真正な宗教的信仰とは必ずしも一体化していないという認識において、メルツドルフは啓蒙主義の時代精神をわかち合っていた。このことは、また唯一神という信仰方

法に見られる両者の伝統的対立の無意味さをさらけ出した。「メーソンの宗教は、ほかのあらゆる宗教の精髓であり、それは倫理的行為及び超越的存在への信仰にほかならない⁹⁾」はずであった。フリーメーソンロッジへのユダヤ人入会をめぐる問題は、フリーメーソンの存在理由と基本理念を超えて、キリスト教徒とユダヤ教徒との宗教的対立の思想的根拠を浮き彫りにするものであった。しかし、ユダヤ人への偏見を薄めようと努力したメルツドルフ自身、この信念の実践についてはいささか曖昧で躊躇した姿勢が認められる。

ライプツィヒのニコラウス教会の副司祭であったルードルフ・リヒャルト・フィッシャー (Rudolf Richard Fischer) は、宗教と神学、キリスト教と教会とを区別する精神において信仰としての真正な宗教的真理を回復しようと意図した人であった。彼はフリーメーソンのなかに世俗の宗教権威を認めず、信仰心という人間の普遍的精神のみを妥当させようと考えた。ユダヤ人がユダヤ教の単なる形式的儀礼に従わないとしても、それはけっして神の信仰に反するものではないことを述べた。そして、キリスト教徒とそのほかの宗教の信者についても同様の信念をもって対応した。フィッシャーはこの信念を、フリーメーソンロッジへのユダヤ人の入会を承認する思想的根拠と見た。

この時代にフリーメーソンについて改革の方向を示したユダヤ人哲学者であるザームエル・ヒルシュ (Samuel Hirsch) は、大胆にもユダヤ教とキリスト教の純化された本質として「フリーメーソン教」という観念を展開した¹⁰⁾。そして、この「フリーメーソン教」を人類の発展段階の啓示として見ようとした。彼はイエスの教えはユダヤ教にとって異質なものではなく、ユダヤ教にはイエスを拒否する理由はないと語った。ユダヤ人の側からは肯定的な宗教思想的論証を企てる哲学者があらわれたが、キリスト教徒の側からはむしろ反対に両者の宗教思想的差異を強調する論証が多い。キリスト教とフリーメーソンとの関係の緊密さを主調することによって、ロッジが相変わらずユダヤ人締め出そうとした根拠がここに読みとれる。

オルデンプルクの主席牧師であり説教者であったエルンスト・ゴットフリート・アドルフ・ベッケル (Ernst Gottfried Adolf Böckel) は、キリスト教の真理が信仰心にあることを説いてユダヤ人とユダヤ教を弁護した。しかし、彼の意図はもちろんキリスト教とユダヤ教との和解を聖書の解釈を通して論証しようとするものではなかった。むしろフリーメーソンからユダヤ教徒を排除しようとする立場にたち、ユダヤ人にユダヤ教の教義の改革とキリスト教への改宗を促そうとするものであった。彼の根本思想は、フリーメーソンロッジへのユダヤ人の入会を制限するどころか、ロッジにキリスト教に奉仕する義務を負

わせようとするものであり、この限りにおいてキリスト教に改宗する以外にユダヤ人がロッジに入会できる可能性は閉ざされた。

フランツ・ヨーゼフ・モリトーア (Franz Joseph Molitor) は、キリスト教のドグマに基づいてユダヤ人の入会を制限する見解を準備した。彼はキリスト教的基礎を欠くならば、フリーメーソンロッジはもはや異教信仰の古代社会に等しいものであると断定する。このことは、フリーメーソンの基本理念をキリスト教神学に基づいて教条的に根拠づけようとする態度を意味すると同時に政治権力がフリーメーソンロッジへ介入する可能性を暗示している。「ユダヤ人合理主義者とキリスト教徒の合理主義者だけがロッジで一致点を見出せるであろう。国家が信仰のないそのような人たちの会合を容認すべきかどうかは熟慮すべき問題である¹¹⁾。」フリーメーソンとユダヤ人コミュニティが、「国家のなかの国家」の建設というユダヤ教のメシア思想と結び付けられて政治権力の潜在的警戒対象であったことがここに見てとれる。

啓蒙主義とフリーメーソン

フリーメーソンロッジは、確かに18世紀ドイツで啓蒙主義精神の覚醒に意義ある役割を果たした。しかし、ユダヤ人とそのコミュニティが目指した非ユダヤ人と同等の市民権や永住権の獲得という問題については議論に上った形跡はない。それどころか、本来、人間の精神的社会的自由が実現される場であったロッジがユダヤ人たちの入会制限に腐心した事例が多く見られる。この意味では、フリーメーソンロッジは18世紀に誕生し様々の目的を掲げた数ある団体・結社のうちの一つに過ぎなかった。この組織を運営する規定が開放と排除の両面をもつことは、フリーメーソンロッジのユダヤ人とユダヤ人コミュニティの扱いをめぐる矛盾にも現れている。

18世紀ドイツ啓蒙主義の展開を特徴付けているのは、議論と秘密と公開という緊張関係である。公開と啓蒙は密接な関係にあって、啓蒙主義は理性の涵養という本来の性格に基づいて情報公開を前提としている。それに対して、秘密は啓蒙の努力と矛盾し人間や社会の理性的合理的認識を妨げる。18世紀では秘密という概念ないし秘密結社は啓蒙主義が闘うべき対象であった。事実、「英知や正義という名前のもとに秘密めいた闇のなかで不正や悪の陰謀を企てる」¹²⁾ 秘密結社があった。それゆえ、たとえば同時代の哲学者ヨーハン・エーリヒ・ビースター (Johann Erich Biester) にとって、「秘密や秘密結社」と闘うこ

とは啓蒙主義思想が担うべき最も意義深い行動の一つであった。このビースターとフリードリヒ・ゲーディケ (Friedrich Gedike) が主宰しベルリンで発刊され広い読者層をもっていた啓蒙的雑誌『ベルリン月報』(Berlinische Monatsschrift) は、この意味で陰謀を指弾し啓蒙主義を促進するのに寄与する指導的機関誌であった。

団体・結社と見られる組織が全て啓蒙主義の精神を掲げたものでも、またその反対勢力というわけでもなかった。むしろ啓蒙主義思想の実践者たちが中心的構成員であった組織もあり、彼らは反啓蒙的団体・結社と闘った。1783年にベルリンで設立された『ベルリン水曜会』(Berliner Mittwochsgesellschaft) はいわばベルリン啓蒙派の代表者たちが参加した議論の場であった。ここにはヨーハン・ザームエル・ディーター (Johann Samuel Dieter)、クリスティアン・ヴィルヘルム・コンラート・フォン・ドーム (Christian Wilhelm von Dohm)、ヨーハン・ヤーコプ・エンゲル (Johann Jakob Engel)、フリードリヒ・ニコライ (Friedrich Nicolai)、モーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn) ら多くの知識人たちが集った。ビースターやフリードリヒ・ゲーディケ (Friedrich Gedike) らが指導的立場にあった。この二人は、一方でまたベルリンのフリーメーソンの本部ロッジ<三つの天球> (Zu den drei Weltkugeln) の会員でもあった。彼らが『ベルリン水曜会』に参加し、『ベルリン月報』を主催し、同時にフリーメーソンロッジの会員であったことは、啓蒙主義思想の実践者としての典型的行動姿勢の現れである。レッシングの『エルンストとファルク・フリーメーソンのための対話』(Ernst und Falk. Gespräche für Freymäurer. 1778) に描かれたフリーメーソンとそのロッジの目的が必ずしも理想と願望に過ぎないわけではなかったことが、彼らの活動に見てとれる。

『ベルリン水曜会』は啓蒙主義の実践を目的に掲げた。「われわれの意図は、われわれとここにいる仲間を啓蒙する」¹³⁾ ことである。そして、彼らは啓蒙主義の実践のために意見を交換し議論し合った。彼らの目的は自己啓発だけではなく、その内容を公表し人間精神を変革し、公衆の啓蒙に寄与することであった。ゲーディケは、1784年に秘密結社に特有の夢想的で危険な兆候を『今日の狂信について』(Über die heutige Schwärmerei) で描いている。

狂信という害毒が……領主や上流貴族の館から汚れた仕事場や農作業小屋までを支配している。どこをみても熱狂的陶醉者がいる。君主の服装、修道院の服、司祭のスカート、軍服、奴婢の服、教養ある者やない者、男や女の間にも見出せる。……

どこを見ても、神知学者や千福年説信奉者、薔薇十字団、錬金術師、似非哲学者、パレケルスス信奉者、精霊崇拜者や祈祷師、霊媒師や黙示録的夢想者が蠢いている。¹³⁾

ゲーディケは狂信とか夢想の内実を明らかにして、それに対抗して全ての活動・行動・目的を公開することを要求した。同時に啓蒙主義団体を擁護し、考えを同じくする仲間たちとの連帯を目指した。この努力は、プロイセンのベルリンを超えて、同じ目的を掲げた地方組織との連携に現れている。啓蒙主義の実践者たちは、確かに教会と支配権力を顧慮し宗教と道徳に関係して自由で大胆な発言をするには十分注意が必要であったが、「認識とか科学とか呼ばれることや直接、間接に哲学的道徳的宗教的と見なされることについては……名声や年齢や聖職者かどうかなどに配慮することなく……大胆かつ冷静に控えめに健全な理性と率直な人間悟性に従い不偏不党に判断する」¹⁴⁾ことを義務と感じていた。

しかし、『ベルリン水曜会』の運営組織には、閉鎖的で秘密結社の部分があった。会員であったカール・フランツ・フォン・アーヴィング (Karl Franz von Irwing) 署名の「入会資格」からはこの会の指導者たちが「会合での会話や判断、意見や主張の内容について良心に従って沈黙を守るという決まり」¹⁵⁾に重きを置いていたことがわかる。啓蒙主義者たちが国家や教会についての矛盾を指摘する場合にも、また啓蒙主義の敵対者たちに反対する場合にも、彼らは少なくとも政治的言動については自分たちの思慮分別を守ることが要求された。一般に団体・結社は設立許可を当局に求める必要も、活動を当局から監視されることもなかった。『ベルリン水曜会』が国家や財政を議論や考察の対象としたとしても、そのもつ影響力はむしろプロイセンの国家体制を補完する役割を担い国家に協力的でさえあった。もちろん、この会の構成員には国家の革命ではなく改革と発展を目標とした官僚たちがいた。この会の議論は、こうした構成員たちを公衆の偏見や猜疑からむしろ守ることの方に力を発揮した。国家体制を補完し擁護する団体・結社である限り、当局は監視と警戒する理由をもたなかった。

一方、プロセインの官僚ヨーハン・ゲオルク・フォン・ツィンマーマン (Johann Georg von Zimmermann) がベルリンの『啓蒙主義ユダヤ人教会』¹⁶⁾を専ら政治的陰謀を企む結社として見た風潮は、この時代のドイツの団体・結社がもったもう一つの面を象徴しているばかりではなく、当時のドイツ社会のユダヤ人コミュニティに対する態度を示している。ベルリンのユダヤ人哲学者でありユダヤ人の公民権獲得のための運動に取り組んだ啓蒙主義者メンデルスゾーンは、この観点から啓蒙の手段と精神の中味を問題にした。彼にとって

「啓蒙主義を促進する唯一の手段が啓蒙主義であり」、「理性と真実の宗教」¹⁷⁾がその方法の一つであった。それゆえ、メンデルスゾーンは啓蒙と夢想とか狂信を二つの全く相反する現象とみなした。啓蒙は自己認識と自己啓発という人間の内的精神に基づき、健康とか病気の治癒というような外面的効果によって現れるものではないことを説き、この誤解が時代の団体・結社に二つの方向が存在する理由であることを鋭く洞察していた。そして、メンデルスゾーンは公衆を啓蒙する「表」の団体・結社と、公衆を密かに迷わす「裏」の秘密団体・結社の違いを目的の公開性に見た。

諸悪の根源は……他ならぬ啓蒙主義によって蓋をされている。その場を明かりで照らすと、亡霊は消え失せる。暗闇で蠢く全てを暴きだし、秘密団体、狂信の秘儀や活動について知っていることを白日のもとにさらし出せ。それで暴露された誘惑者たちを軽蔑せよ。だが、誘惑されたものには風刺の鞭ではなく赦しをもて。¹⁸⁾

『ベルリン水曜会』の一員でもあったメンデルスゾーンは、これを「秘密」的団体ではなく、むしろ肯定的に友情と信頼に基づいた啓蒙的同士の集まりと見た。そこでは世間に対して閉ざされていたからこそ私的な「サークル」のように自由に制約を受けずに考えを述べることができたし、また公表したくない大きな疑問さえもはばからず言える環境があることも認めていた。じじつ、『ベルリン水曜会』は名前と存在が全く知られてはいけなような秘密結社ではなかった。換言すれば、世間的には『ベルリン水曜会』という名前を、内部的には「啓蒙を奉じる友人たちの会」という性格をもっていた。秘密の保持は世間向けであるに過ぎず、真理は絶対に隠されてはならなかった。啓蒙主義と真理の公開とは不即不離の関係にあった。「人間が心のなかで真実だと思うことをなんでも公表できないならば……嘘や偏見に堪えることが聖なる秘密となってしまう¹⁹⁾。」

メンデルスゾーンには現実の具体的危機が意識されていた。つまり、ユダヤ人コミュニティと秘密結社・団体が一体と見られる危険を感じ取っていたばかりではない。人間の平等・自由・宗教的寛容など啓蒙主義の精神を実践しているかに見えるフリーメーソンロッジがユダヤ人の入会を制限していたこととその組織の「神秘」に深い懷疑を抱いていた。彼はこの時代のフリーメーソンロッジをこうした負の側面を多くもつ秘密結社「金十字団」(Orden des Goldkreuzers)や「薔薇十字団」などと同等の評価しか与えなかった。メンデルスゾーンの最も信頼した友人でありかつ代表的な啓蒙主義者ゴットホルト・エーフラ

イム・レッシングがフリーメーソンロッジの会員であることを知ったとき、彼はひどい落胆を味わわざるを得なかった。それは、ユダヤ人メンデルスゾーンにとって、レッシングが理想としたような共和制の「市民的国家」の在り方を示すものなどではけっしてありえず、真理の公開と実践とはかけ離れた「専制主義」的組織そのものを具現しているものに他ならなかった。フリードリヒ大王がフリーメーソンであったという事実が、ロッジと現実の政治体制との関係を何よりも物語っている。

メンデルスゾーンは一般にユダヤ人を締め出しているフリーメーソンロッジを不条理な団体とみなしただけではない。その活動を危険なものを見ていた。フリードリヒ大王はユダヤ人にベルリンでの居住を認め、非ユダヤ人と同等の公民権を与えたかに見える。しかし、その実態は裕福で彼の国家にとって利益をもたらす一部のユダヤ人を対象としたに過ぎず、全てのユダヤ人に公民権を保証するものではなかった。この意味で、ベルリンのイッヒに代表される国家に協力的で教養あるユダヤ人はフリーメーソンロッジにも加入が許されたのである。フリーメーソンロッジはメンデルスゾーンにとって人間の平等や自由や宗教的寛容を実践した啓蒙的団体ではなく、ましてやユダヤ人の解放とユダヤ人コミュニティの開放を促す力となるものでもなく、ユダヤ人の間にむしろ選別と差別と分裂をもたらす18世紀ドイツ社会の縮図と見えた。『ベルリン水曜会』という言論機関に属し、『ベルリン月報』を発刊し、フリーメーソンロッジ〈三つの球体〉に参加し啓蒙主義の実践者を自認していたゲーディケやビースターの意識と行動の根底にあったこうした矛盾を、ユダヤ人メンデルスゾーンの鋭く研ぎ澄まされた洞察力は見逃してはいなかった。

むすび

ドイツの三月革命以後、原則的にユダヤ人の政治的要求が一部認められてからは社会一般にユダヤ人とそのコミュニティに対して偏見が消えていくかに見える。フリーメーソンの内部でも、この社会動向に呼応してユダヤ人に開かれたロッジは増えた。しかし、ユダヤ人コミュニティは、そのときどきの支配者の政治政策に左右される要素を多分にもっていた。フリーメーソンロッジもまたこうした社会変化を反映することになる。反ユダヤ主義思想が力を得たとき、ユダヤ人に対するフリーメーソンロッジの開放施策も事実上中断された。

フリーメーソンに対しては、当初カトリック教会が警戒心をもっていたし、ユダヤ人は

特に宗教心に篤い人々から猜疑の目で見られた。この意味で、フリーメーソンとユダヤ人が、根拠はないが共同して特殊なコミュニティを形成していると同一視される可能性がなかったとはいえない。フリーメーソン憲章が有する平等や宗教的寛容思想は、ドイツにおいて反ユダヤ思想が高まったときには、市民の側からユダヤ人擁護あるいはシオニズムの団体としてみなされる根拠となったし、革命によってユダヤ人に公民権が認められたときにはユダヤ人の権利を実現するための根拠と見られた。両者は目的と行動において一体であり、組織としても同盟関係があると宣伝され、政治的に利用される可能性はいつでもあり得たのである。

フリーメーソンはユダヤ人の影響のもとに誕生したのではない。しかし、フリーメーソンの活動とユダヤ人が近代のヨーロッパ社会に根を下ろしていく過程は重なっている。フリーメーソンロッジの憲章と活動は、そのまま実践に反映することがなかったとしても、人間の平等と宗教的寛容という普遍的ヒューマニズムに根拠をもっていた。これらが、ユダヤ人コミュニティの存在や市民的権利の保証として人間精神の発展のうちに基盤として意識され、やがて社会制度として実現されていった。確かに、これらが精神的にも社会的にもヨーロッパ近代に確立される過程に認められるのは、支配者に対する非支配者の闘いであり、非ユダヤ人・キリスト教徒のいわれなき中傷に対するユダヤ人・ユダヤ教徒の闘いがあった。この意味で、ユダヤ人のドイツ社会における市民権の獲得とフリーメーソンロッジの拡大の間には近代社会におけるヒューマニズムの展開史という観点から深い歴史的関連が認められる。

注

- 1) James Anderson: The Constitutions of the Free-masons, London 1723, p.50.
- 2) M.Levy: "Jews as Freemasons," The Jewish Chronicle(Sept.16.1898),p.11.
- 3) Jacob Katz: Echte und imaginäre Beziehungen zwischen Freimauerei und Judentum. In: Wolfenbüttler Studien zur Aufklärung. Band V/I. Geheime Gesellschaften. Hrsg.v. Peter Christian Ludz, Heidelberg 1979, S.54f. ここに述べられている史料をみると、1732年にエドワード・ローズというユダヤ人がロンドンロッジに入会した。ロッジではこのユダヤ人の入会の賛否をめぐって議論が起こったが、結局入会が認め

られた、という。1740年以前にもユダヤ人の入会者の例はあった。

- 4) Jacob Katz: Juden und Freimaurer in Europa 1723-1939. 『ユダヤ人とフリーメイソン』綾部恒雄監修 大谷裕文訳 東京 1995年 52ページ。
- 5) 同上書50—51ページ。
- 6) 同上書51ページ。
- 7) Friedrich Münter: Authentische Nachricht von den Ritter- und Brüder-Eingeweihten aus Asien. Copenhagen 1787. S.1.
- 8) Theodor Merzdorf: Die Symbole, die Gesetze, die Geschichte, der Zweck der Masonei schliessen keine Religion von derselben aus. Leipzig 1836, S.15-19.
- 9) Ebd., S.22.
- 10) Samuel Hirsch: Die Humanität als Religion, in Vortragen, gehalten in der Loge zu Luxembourg. Trier 1854.
- 11) Franz Joseph Molitor: Die Freimaurerbund seinem philosophischen, religiösen und geschichtlichen Standpunkte nach ; nebst Hinblick auf das Verhältnisse der Israeliten in demselben. Darmstadt 1843, S.37f.
- 12) Norbert Hinske(Hrsg.): Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift. In Zusammenarbeit mit Michael Albrecht ausgewählt, eingel. und mit Anm. versehen. Darmstadt 1981, S.235.
- 13) Johann Karl Wilhelm Möhsen: "Was ist zu thun zur Aufklärung der Mitbürger?" Vortrag vom 17. Dez. 1783. Abgedr. in : Ludwig Keller: "Die Berliner Mittwochs-Gesellschaft. Ein Beitrag zur Geschichte der Geistesentwicklung Preussens am Ausgange des 18. Jahrhunderts". In : Monatshefte der Comenius-Gesellschaft 5 (1896), S.67-94.
- 14) Die in einem Konvolut aus dem Nachlas Johann Karl Wilhelm Möhsens erhaltenen Papiere der Gesellschaft im Besitz der Deutschen Staatsbibliothek Berlin-DDR. (Ms.Borusse.fol.Bl.223.)
- 15) Friedrich August Tholuck: Die Gesellschaft der Freunde der Aufklärung in Berlin im Jahre 1783. In: Literarischer Anzeiger für christliche Theologie und Wissenschaft überhaupt I (1830), Sp.57f.
- 16) Johann Georg von Zimmermann: Fragmente über Friedrich den Grossen zur Geschichte seines Lebens, seiner Regierung, und seines Charakters. Bd.III. Leipzig 1790, S.149-194.

- 17) Moses Mendelssohn: Jubiläums Ausgabe VI-I, S.137-141.
- 18) Ebd.S.140.
- 19) M.Mendelssohn: Über die Freiheit, seine Meinung zu sagen, JubA VI-I, S.124.

付 記

この論文は、平成11、12年度科学研究費補助金「基盤研究（C）2」による『研究報告書』掲載の「フリーメーソンロジとユダヤ人コミュニティ」を大幅に加筆し修正したものである。

Freimaurerloge und die jüdische Gesellschaft

— Eine Studie über die deutsche Gesellschaft des 18. Jahrhunderts —

In diesem Aufsatz wird die Beziehungen zwischen den Freimaurerlogen und den jüdischen Gesellschaften im Verlauf der geschichtlichen Entwicklung im 18. Jahrhundert Deutschlands behandelt. Die Idee der Freimaurerlogen wird im Grunde auf neue Wahrheiten der Aufklärung, also Freiheit, Gleichheit und die religiöse Toleranz unterstützt. Die Juden und Aufklärer in Deutschland erwarteten, daß die Logen auf die Entwicklung und Verbesserung der menschlichen Gesellschaft auswirken wird.

Moses Mendelssohn, den man als Repräsentanten der Aufklärung ansieht, hatte in Deutschland nicht nur auf dem Gebiet des menschlichen Geistesgeschichte, sondern auch auf dem Gebiet der sozialen Geschichte in diesem Zeitalter eine wichtige Rolle gespielt. Es lag ihm daran, den Juden das soziale Recht ebenso wie das der Deutschen gegeben zu werden. In diesem Sinne hatte er sich für die Juden bemüht, die die Gelegenheit zum Eintreten in die Loge hatten ergreifen möchten. Aber seine Bemühungen waren schwer zu verwirklichen. Von diesem Gesichtspunkt her erklärt sich das despotische Nationalsystem und die Unmündigkeit der deutschen Gesellschaft im 18. Jahrhundert.

(2001年 6 月 1 日受理)